

【Q3のねらい】

累積相対度数をグラフに表し、増えていくようすをグラフから読み取る。その際に、グラフの縦軸の値に着目し、「全体の○%が△分未満である」というような見方で資料の傾向をとらえ、2つの資料を比べたり、傾向のちがいを説明したりすることができる。

① 「中央値」について事前に指導する

「中央値」とは、数値で表された資料を大きさの順に並べたとき、その中央にある数値のことである。資料の個数が偶数のときは、中央の2つの数の平均をとる。ここではA中学校における20番目と21番目、B中学校における50番目と51番目の生徒の通学時間の平均の値が、それぞれの中央値である。

ここで与えられている資料から中央値そのものを求めることはできないが、中央値までの累積相対度数は0.5なので、中央値をふくむ階級において累積相対度数が0.5を超える。このことから、累積相対度数のグラフの縦軸の値が0.5を超える階級を読み取ればよいことがわかる。

② Q3(1)を省略する

(1)の省略に伴い、(2)を考える手がかりとして、累積相対度数のグラフの縦軸の値に着目させ、「全体の○%が△分未満である」というような見方で2つの資料の傾向をとらえ、説明できるように促す。たとえばA中学校のグラフで縦軸の値が0.5を超える位置を読み取ると、全体の50%が通学時間20分未満であることがわかる。同様にB中学校についても調べ、傾向のちがいを比べる。

③ Q3の指導時期を教科書251ページの学習後にする

教科書p.248～251の「資料の代表値(1),(2)」で代表値の学習を終えた段階で、Q3を扱うことも考えられる。